

題目：共有された信念の自己維持メカニズム—予言の自己実現の観点から—

氏名：大橋加奈子

指導教官：山岸俊男

文化の自己維持メカニズムを明らかにする方法としては、文化で優勢とされる価値や選好を内在化する「文化的エージェント」を想定するアプローチと、文化的な価値や信念を自分の行動を決定する際の道具として用いる「文化的ゲームプレイヤー」を想定するアプローチの2つがある。本研究の目的は、これまで見落とされがちであった後者のアプローチに焦点を当て、東アジア文化圏に属する日本人の「協調性」に関する信念の自己維持メカニズムを検証すること、そしてメカニズムの成否に関わる要因を検討することにある。

研究1では、「日本人は、周りの人たちは独立的な人に対してネガティブな反応を示すだろうと予測するために、人々は独立的な振る舞いを好みながらも協調的に振舞う」という先行研究（橋本・山岸, 2009）の知見が一般成人（日本人）に当てはまることが示された。さらに日米の学生を対象に同様の質問紙調査を行ったところ、日本人はアメリカ人よりも、1）他者は協調的に振る舞うだろう、そして、2）個人的には独立的な人を好ましく評価するが、他者は協調的な人を好ましく評価するだろう、と強く予測していることが示された。これらの結果をもとに、研究2では日本人の「他者がどのように振る舞っているか」に関する信念に着目し、「周囲の人たちが他者の振る舞い、あるいは評価をどの程度気にしていると思うか」や「独立的に振る舞うことを評価することすらも、他者からネガティブな反応が返ってくると予測しているか」という点を質問紙で尋ねた。その結果、「周囲の人たちは他者の評価を気にしているだろう」と考えている人ほど「独立的な人（あるいはそれを評価する人）に対して他者はネガティブな反応を示すだろう」という信念を強く持っていることが示された。

人々がこのような信念を持っているとすれば、協調的に振る舞うことは社会的に“賢い行動”であり、人々がそれを実践することで、「他者は協調的に振る舞う」、「他者は協調的な人（あるいはそれを評価する人）を好ましく評価する」といった社会的現実が作られる。人々の他者に関する信念はこの社会的現実によって強化され、協調的な行動が人々にとって“賢い行動”である限り、日本人の協調性は自己維持される。本研究の結果は、日本人の協調性の背後に予言の自己実現のプロセスが存在していることを強く示唆している。